



虫管は、誰が考案したのかはわからない。ひょっとしたら九大農学部 昆虫学教室のオリジナルかもしれない。しかし、これまでいくつかのクモ採集会に参加したが、こんな吸虫管は見えない。

#### 大熊先生の吸虫管について

この大熊先生の吸虫管はとにかく丈夫である、小さなクモでも決して逃がすことはない。そして何よりも軽いという吸虫管に要求されているすべての点をクリアしている逸品である。しかも材料の値段も安く、誰にでも作れるという本当にすばらしいものである。

#### 作り方

材料（シリコンのチューブ、プラスチック製の筒、捕虫網の切れはし）

シリコンチューブを図のような長さに切る。プラスチック製の筒も図のような長さに切断する。これらをシリコンチューブに差し込むだけである。クモを吸う吸い口の部分には捕虫網の切れはしをはさんでおく。こうすることで、吸った獲物はこの部分でとまる。

#### 使い方

チューブは細長いので、中央部分にひもをつけて、そのひもを首にかけておく。場合によってはこのチューブを首に巻いてもいい。実際にクモを見つけたら、一方を口に含んで吸引する。クモは捕虫網の切れはしをはさんだ部分で止まる。今度はアルコール瓶の中に吹き出せばいいのである。

現代の自然科学の研究には「哲学する力」「論理的に推理する力」そして「ハイテクを駆使する力」の3つの力が必要である、と私は考えている。クモの生態や進化あるいは多様性の研究

についても同様である。ただし、最後のハイテクというのは必ずしも高額な精密機器だけを指すのではない。むしろ使い勝手の良い道具もまたハイテクの一種なのである。いい道具というのは多くの人を使うべきで、そのことによってクモの採集効率があがり、よりいっそう調査、研究が進展する可能性があるのである。

次回に続け、という願いを込めて、タイトルには番号をつけてしまった。自分の使っている道具（例えばトラップなど）はとても優れた逸品であるという方がいたら、是非紹介していただきたい。

#### 西表島クモ談話会奇行（2）

平松毅久

「ガチャリ」100円硬貨が落ちる音で目が覚める。日付は8月14日になっているが外は暗くまだ宵の口である。ウトウトし始めたと思う間もなく蒸し暑さのあまりまた目が覚めた。クーラーが切れたらしい。実はこの民宿のクーラーはコイン投下式で1時間100円なのだが1度に400円分しか入れることができない。谷川氏から事前に聞いていたので100円玉をかき集めて来たのだが、「クーラーなしでは暑くて寝られない」という言葉には「寝入ってしまえば勝ち」とたかをくくっていた。ところがその考えが甘い事にすぐ気付いた。やむなく100円玉を入れてもう1度寝入り、次に目覚めたときには太陽が既に昇っていた。

この日は民宿の中学2年の息子さんが夏休みの自由研究のテーマにクモを選び、友達と2人で西表クモ談話会の臨時メンバーとして同行することになり指導教官の谷川氏も朝から張り切